

鶴峯戊申『語学新書』とその背景

Concerning Tsurumine Shigenobu's *Gogaku Shinsho*

松村 明*

The *Gogaku Shinsho* (“New Treatise on the Study of Language”), published in the fourth year of Tenpo (1833) in two volumes, is known as the first Japanese grammar to be composed under the influence of Dutch grammars. Shigenobu had earlier published, in the 13th year of Bunsei (1830), a single page leaflet under the title *Gogaku Kyūri Kuhon Kukaku Sōkatsu Zushiki* (“A General Scheme of the Principles of [the Japanese] language in Nine Classes and Nine Cases”), and the *Gogaku Shinsho* is a more detailed exposition of the scheme outlined there.

Shigenobu's nine classes comprise *Jittaigen* (nouns), *Kyōtaigen* (adjectives), *Daimeigen* (pronouns), *Rentaigen* (participial adjectives), *Katsuyōgen* (verbs), *Keiyōgen* (adverbs), *Setsuzokugen* (conjunctions), *Shijigen* (prepositions), and *Kandōgen* (interjections). His nine cases are the Nominative, Genitive, Dative, Accusative, Ablative, Vocative (these six are the set of *Taigen Joji*) and the Present, Past and Future (these three are the set of *Yōgen Joji*).

Shigenobu's learning was very extensive, ranging over the

* MATSUMURA, Akira 東京大学名誉教授

fields of Japanese, Chinese, Sanskrit and Western studies, and he authored numerous works concerning each of these. In the area of linguistics alone, one can cite, in addition to the aforementioned texts, his *Samashikyō* (磋磨詞鏡), *Gogaku Hituju* (語学筆受), *Jindai Mojikō* (神代文字考), and *Zōho Taisei Seigo Kanazukai* (増補大成正誤仮名遣), on Japanese linguistics, the *Shibun Ruigo* (詩文類語), *Jukugo Jōshiki* (熟語定式) and *Joji Yōhō* (助辞用法) on Chinese, the *Inkyō Kuju* (韻鏡口受), *Inkyō Densho* (韻鏡伝書), *Kurō Kujuki* (九弄口受記) and *Shōgaku Jibohyo* (小学字母表) on Chinese phonology, the *Shittan Hituju* (悉曇筆授), *Bongo Shin'yaku* (梵語新訳), and *Shittan Senryakushō* (悉曇浅略抄) on Sanskrit, and the *Garamatika Gogaku* (ガラマチカ語学), *Yōbun Honyaku Benran* (洋文翻訳便覧), *Yōgo Haishōka* (洋語背誦歌), *Ran'on Kanazukai* (蘭音仮字格), *Hayabiki Ranjitsū* (早引蘭字通), and *Oranda Jukugoshū* (和蘭熟語集) concerning Western (Dutch) linguistics.

The approach to Japanese linguistics adopted by Shigenobu in his *Gogaku Shinsho* (語学新書) shows evident similarities to that of his studies not only of Dutch but of Sanskrit, as well. Thus, while there is no question that the *Gogaku Shinsho* (語学新書) is directly influenced by Dutch grammars, the close relationship between this work and its author's studies of Chinese phonology and Sanskrit should not be overlooked. The purpose of this paper is to examine this relationship.

この会が開かれるにあたりましては、フォス先生がお話しになるので、

フォス先生との関係で蘭学関係のことを何か話してほしいと小山館長からお話があり、私はフォス先生にはだいぶ前オランダに行きましていろいろ御世話になったりしておりますものですから、この会にはどうしても出なければいけないということでお引き受けいたしました。私の専門は国文学ではなくて国語学ですから、国文学の研究集会でどういふことをお話してよろしいかいろいろ迷いましたが、やはり私の専門の国語学関係で、しかも蘭学とのかかわりが深い問題ということで、「鶴峯^{しげのぶ}戊申の『語学新書』とその背景」という題でお話しさせていただくことにいたしました。

何と申しまして、蘭学と国語学との関係というのは非常に限られた範囲のことでございまして、話がどうしても細かいこと、或いは部分的なことになってしまうわけですが、御承知のように国語学史の上では鶴峯戊申の『語学新書』というのは、日本語の文典としてまとまった形で幕末にいち早く出たものとして、しかも初めて西洋文典（オランダ文典）をもとにした日本語の文典であるということで、必ず国語学史では取り上げられているものであり、したがって、国語学を学ぶ者には、鶴峯戊申の『語学新書』はよく知られているのですが、国語学以外の方にとっては、それがどういうものかあまりおわかりにならない方もあるかもしれませんので、少し解説的なことも含めてお話し申し上げようと思います。

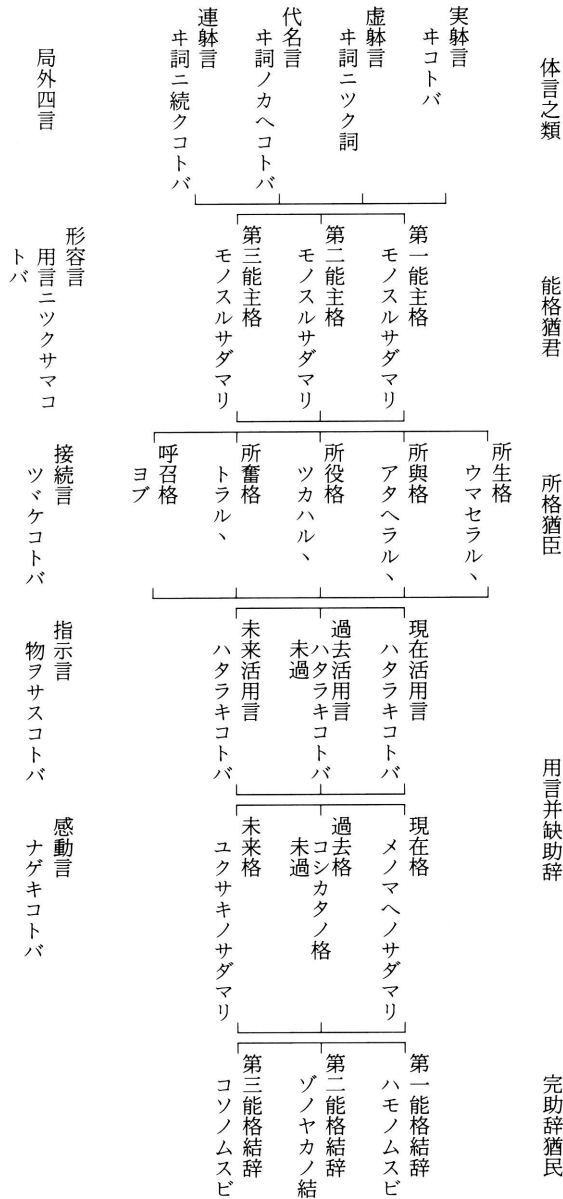
ここで私が申し上げようとすることは、最初に結論めいたことを申しておきますと、ごく簡単なことなのです。従来^{しげのぶ}の国語学史で鶴峯戊申の『語学新書』が出てまいりますときには、オランダ文典の影響によってできた初めての日本文典、しかも、それは西洋風のオランダ文典と従来の日本語の研究とを適当に折衷してできた、ある意味ではきわめて雑駁なもので、それだけに後世にはあまり直接の影響を与えないままに終ってしまったというふうな形で紹介されているわけです。しかし、私がここで申し上げたいことは、鶴峯戊申の『語学新書』がオランダ文典の影響のもとに出来上がったことはもちろん否定できない、非常にはっきりしたことなのですが、鶴峯戊申の学問全

体の中でみますと、オランダ文典のただ単なる焼き直し、或いはオランダ文典だけからの影響ということではなくて、鶴峯戊申はオランダ語以外にも、漢語学や悉曇学などの外国語学もいろいろと研究しておりまして、それら悉曇学や漢語学の研究の上に西洋から新しい外国語であるオランダ語学の知識などを含めたものの中から生まれた、言語の一般的なあり方としての一般文法的な形で『語学新書』がまとめられたように見受けられる、とそういうことを申し上げようとするわけです。もちろん、当時の彼の理解はごく皮相なものでしかありませんので、出来上がった結果はあまり後世に影響を及ぼすことなく終わってしまいますが、単なるオランダ文典だけでなく、むしろ悉曇などとも非常に深く関わりあっているものだということを理解しておく必要があると思うのです。悉曇の研究は日本ではすでに早くから行なわれておりますが、それは従来音韻中心に行なわれてきたわけです。それが鶴峯戊申にあっては、オランダ語学などに接したこととも深く関わって、悉曇学の中でも文法的な面に注意が払われるようになりました。そのような、悉曇学やオランダ語学の知識を土台にして、日本語の文典という形でまとめられたものが『語学新書』だということを申し上げようと思うわけです。

資料をプリントしてきましたので、プリントにそって、少し具体的なことを申し上げていこうと思います。

『語学新書』は上下二巻から成るもので、上巻の方にはいわゆる品詞論、下巻の方には格変化というような形で、九格という格の問題として「テニヲハ」などの具体的な扱い方が説かれています。『語学新書』の前に、戊申は一枚刷りのもので、『語学究理九品九格總括圖式』というものをを出しております。彼の『語学新書』で説いていることを図式的にまとめたものがこれで、『語学新書』そのものの内容はこれで大体つかむことができます。むしろこれの解説と申しますか、これの説明書というような形でいろいろ細かい用例その他を入れて、更に細かくいろんな分類をして説明しているのが『語学新書』二冊の本になっているということです。『語学究理九品九格總括圖式』

『語学究理九品九格總括圖式』（文政十三年刊）



もかなりごたごたしておりますので、これを項目的に簡単に抜き書きしましたものが資料1として掲げてある図式になるわけです。一番上に体言之類として実体言・虚体言・代名言・連体言という四つの品詞をあげております。それに対して、局外四言として、形容言・接続言・指示言・感動言、この四つを左の方に載せております。これもまた四つの品詞にあたるものです。実際には、ここにそれぞれ用例が書き入れられているのですが、それはここには省かれております。そして、図式の二段目に「能格^{ナオキミノゴトシ} 猶君」として、能主格を第一・第二・第三の三つに分けて置いております。第一能主格というのは、「は」とか「も」とかいうテニヲハにあてております。第二能主格には「ぞ・の・や・か・が・なん」というようなものが入っております。そして第三能主格が「こそ」です。ですから、本居宣長のことばで言えば、第一能主格はいわゆる「徒^{ただ}」にあたるものです。「ぞ・の・や・か・こそ」は、いわゆる係りのテニヲハとして第二・第三の能主格にあたるということです。以下、そのようにして三段目に所生格・所與格・所役格・所奪格それから呼召格、この五つの格を置きます。その下に現在活用言・過去活用言・未来活用言、要するに動詞ですが、活用言というものを置きます。それで一番上の四つと左わきの四つと、それから活用言、これで九つの品詞となるわけです。その活用言の下に現在格・過去格・未来格の三つの格を置きます。能主格と三段目の五つの格、それから活用言の下の現在格・過去格・未来格、これらを合わせて九格です。それで九品九格ということです。『語学新書』では、上巻において、九品、九つの品詞を中心に具体的に説明がなされ、下巻には九格のことが説かれるという構成になっています。

資料2

『語学新書』自序

ことばまなびのあたらしぶみのはしがき、

(前略) いまこのふみは、をはりびとよしをのなほさだ、そのいへにものま

なびする。さいとうのはるまさにあとらへて、したしくおのれがさとせるまゝを。はぎがうへのつゆたがはず。うつしとらせたるになんありける。さてもかうやうにうつしとりたるを見れば。いまよりゆくさきこと葉のおぼぢゆきかふともがらの。そのしをりともなりぬべく。けぶりそめたるあをやぎの。いとおむがしくおもはるゝも。これしかしながらことだまのさちはひたすくるしるしにこそ。こゝにふみの名をことばまなびのあたらしふみとおほせて。そのよしいさゝかかきつくるは。てむぼうのふたとせといふとしのしはすのもちばかり。をはりのたびやどりになむ。

つるみねのしげのぶ

『語學新書』序説

語學新書序説

門人 尾張 齋藤春昌撰

此書もと詞の品定と名づけて、九品に九巻、九格に九巻、附録に二巻、すべて二十巻なりしをさては受業のもの謄寫もたやすからねば、同盟あひはかりて、つひに師にこひて、本書のしげきを節して二巻となしつるを、名をもあらためて、語學新書とはせられたるなり。（後略）

この『語学新書』ですが、資料2の自序において、ここに引用したのは長い自序の一番終わりのところですが、「いまこのふみは」すなわちこの『語学新書』は、「をはりびとよしをのなほさだ。そのいへにものまなびする。さいとうのはるまさにあとらへて。云々」と、こういうふうになっておりまして、その「さいとうのはるまさ」が「語学新書序説」として序説を書いております。要するに、この本を具体的にこういう形でまとめたのは、尾張の門人齋藤春昌であるというわけで、その齋藤春昌の蘭学についての師弟の関係がこの自序のところにでております。つまり、齋藤春昌の師にあたるのが「よしをのなほさだ」で、その「よしをのなほさだ」というのが、資料3の「蘭語学の系譜」に書いておきましたが、齋藤春昌の上の吉雄俊藏です。ですから、『語学新書』のオランダ語関係の系譜を考える上において、戊申の門人齋藤春昌、その蘭学関係の師匠の吉雄俊藏、更に遡ればそれが吉雄如淵から中野柳圃へというふうに遡ってゆく系列が考えられるのです。それに、

わが国における刊行された最初のオランダ文典である、藤林普山の『和蘭語法解』の影響も、鶴峯戊申は当然受けているのです。『語学新書』のオランダ語学から受けた系列は一応このようにたどれるわけです。実際には、これらの人々以外にも、戊申は、たとえば前野良沢のオランダ語関係の本をいろいろ写したりもしておりますし、それから大槻玄沢の『蘭学階梯』その他実際に刊行されている蘭学関係、オランダ語関係の本もいろいろ見て、そういうものを適宜いろいろ使っているわけですから、必ずしも、中野柳圃のこの系列だけではないともいえます。蘭学、特にオランダ語学の系列から言えば、中野柳圃以下の系列は長崎における通事出身のオランダ語学者によるオランダ語研究の系列です。これとは別に、江戸の方では、前野良沢以下大槻玄沢その他のいろんな蘭学者が輩出して、その系列のオランダ語学もずっと発展してくるわけですが、戊申は長崎系列のオランダ語学を土台にしてはいるものの、それ以外に、江戸の方の蘭語学も随時いろいろ勉強し、鶴峯戊申は自分流にそれらを適宜修得して、『語学新書』の中にいろんな形で生かしているということがいえるわけです。

資料3

蘭語学の系譜

中野柳圃——吉雄如淵——吉雄俊藏——齋藤春昌

- ・中野柳圃（1760～1806）志筑忠雄。「四法諸時対訳」「和蘭詞品考」「助詞考」「蘭学生前父」「柳圃中野先生文法」「九品詞名目」など。
- ・吉雄如淵（1785～1831）名は永保、また尚貞、号は如淵、通称権之助。「重訂属文錦囊」など。
- ・吉雄俊藏（1787～1843）諱は尚貞。字は伯之。号は南臯、通称常庵・常三。「六格前篇」など。
- ・藤林普山（1781～1836）編著に「和蘭語法解」「譯鍵」「蘭學遷」など。「和蘭語法解」（文化12年刊）は、刊行されたオランダ文典としてわが国最初のもの。

戊申の語学を考える上においては、以上のこととは別に、国語学史のオーソドックスな語学の系列、すなわち本居宣長などを中心にした本居学派の人々の語学をも土台にしているわけで、最初の図式を見てもすぐわかりますが、これは本居宣長の『てにをは紐鏡』の形を変えたものであるということがいえますし、また彼は『語学新書』の中にいろいろ日本語の用例を入れてありますが、その中には『てにをは紐鏡』の解説書である『詞の玉緒』などの用例が随分そのまま取り入れられているということがいわれております。

資料4

(語学究理九品九格総括圖式の下部の説明)

此図式ハ、雅語ハモトヨリニテ、スベテ天ノ下ニアラユル訓語韻語トモニ活盡セル図式ナリ、サレドモ千言萬語此一図ニ備フベキニアラズ、ソハ一ヲ推テ十二及ボシ、十ヲ推テ百ニ及ボシ、其試ムル所ニ從ガヒワキマヘサトスベキナリ、ナホ詳ニハ詞ノ品定及ビ論語語論等ニ論ラヘリ、ソモソモ詞ノ品格ヲ、或ハ九品六格トシ或ハ十品四格トスル説ナドモ聞ユレドモ、九品九格ナルヲハ、今コ、ニ図スル所ヲ見テモ知ラル、ナリ、(後略)

東京大学の国文学研究室にあります本居文庫の中に収められている『詞の品定』という十二枚ぐらいのごく小さな本がありますが、この『詞の品定』という本は、その題名の右方のところに「語学新書抄」の「抄」を消して、それに「前稿抄」を書き加えております。この『詞の品定』については、『語学究理九品九格総括圖式』の下のところ、この図式の簡単な解説がついています、その最初の部分(資料4)に「ナホ詳ニハ詞ノ品定及ビ論語語論等ニ論ラヘリ、云々」とあります。『詞の品定』というのは『語学新書』の序説にも実はその書名が出てまいりまして(資料2)、「此書もと詞の品定と名づけて、云々」とあります。しかも、それによりますと、「此書もと詞の品定と名づけて、九品に九巻、九格に九巻、附録に二巻、すべて二十巻なりしを、云々」というようにしるしており、『詞の品定』というもの

はかなり大きな書物であつたらしいのですが、現在はこの元の形の『詞の品定』というのは見つかっていないようです。いま『詞の品定』という書名のものとして所在のわかっているのは、前記の十二枚位の小さなものだけです。これですと、実はむしろ『語学新書』の要約みたいなもので、『語学新書』のごく要点だけを抜き書きしたような形のもので、ところで、実はこの『詞の品定』の中に「悉曇八轉聲」ということが出ております。この書物の冒頭で九品のことをしるしたあとに、「悉曇八轉聲」として、「体声鉢言也。業声役セラル、格㊦。作声モノスル㊧。爲声アタヘラル、㊨。因声トラル、㊩。属声ウマセラル、㊪。依声アタヘラル、格ノ内、物ニヨルカタノ㊫物ヲサス詞ノ内也。呼声ヨブ㊬。というようにあります。これが注意をひかれるところなのです。つまり、この『語学新書』が単なるオランダ文典の焼き直し、あるいはオランダ文典だけをもとにしてまとめられたものというようなものではないことは、いろんなところに出てくるわけですが、ここに「悉曇八轉聲」が出ていることによってもそのことがうかがわれます。少し解説的に申しますと、「悉曇八轉聲」というのは悉曇、つまりサンスクリットの格変化であって、悉曇八轉聲そのものはすでに早くから日本に伝わっております。悉曇は平安朝や中世に盛んに日本で研究されるわけですが、ただその頃の悉曇学におきましては八轉聲の本当の意味がなかなかわかりませんでした。むしろ悉曇の文字及びその読み方、発音の問題や音韻研究の方で、悉曇は日本語研究の中に非常に大きな影響を及ぼすわけですが、格変化としての八轉聲そのものは、八轉聲という言葉は早くから悉曇を研究する人の間には知られていたのですが、これが動詞の活用のように、誤って受け入れたことなどということはありませんでしたが、「てにをは」の用法というようなものとしてはっきり位置づけられるということはずっとできないままにきておりました。『詞の品定』では、日本語の「てにをは」などに結びつけてここにとらえられているというのは、きわめて注目すべき点だと思われます。

次に、鶴峯戊申のオランダ語関係のものを少しここで見ておこうと思いま

す。

資料5 鶴峯戊申の著書（語学関係）

戊申の学問は国・漢・梵・洋にわたってきわめてひろく、また、それぞれの領域で多数の著書がある。語学に限っても、『語学新書』、『語学究理九品九格總括圖式』のほかに、『磋磨詞鏡』『語学筆受』『神代文学考』『増補大成正誤假名遣』など国語関係のもの、『詩文類語』『熟語定式』『助辞用法』など漢語学関係のもの、『韻鏡口受』『韻鏡傳書』『九弄口受記』『小学字母表』など韻鏡関係のもの、『悉曇筆授』『梵語新訳』『悉曇浅略抄』など悉曇関係のもの、『ガラマチカ語学』『洋文翻訳便覧』『洋語背誦歌』『蘭音仮字格』『早引蘭字通』『和蘭熟語集』など蘭語学関係のものがある。

資料6『洋文翻訳便覧』（5オ～7オ）

熟語^{ジュクゴ}ヲハ、和蘭文典^{ワシヘ}ニ教タル、十品四格。ニテサトスベシ。

文典ハ張表ニ見エタルセルスタンヂヘナームウヲールデンハ実名詞ト譯ス名言トモ譯ス實字ナリ、實體言也。

同十五張表^{テニヲハ}リットウヲオールデンハ冠詞ト訳ス、性言トモ譯ス、我國ノ助辞^{テニヲハ}ニ當ル、但シ、冠詞ハ我國ノ助辞ヨリモ、入組タル子細有り、後ニ見エタリ、

同二十張表^{ベイフーグレイキナームウヲールデン}ハ附属名詞ト譯ス、附属名言也、虚字ナリ。虚體言也、

同二十一張表^{テルウヲールデン}ハ数詞ト譯、数量言ナリ。

（中略）

文典ノ十品四格ヲ、学ブニハ、九品九格ヲ先覺ユベシ。

西洋ニテ言語文字ノ品格ヲ論ズルニ、初メハ九品六格トシ、後二十品四格トス、猶悉談ノハ轉聲體業作為從属依呼ハ聲ノ中、呼聲ヲ除キテ七例トスルガ如シ、

（中略）

六格ハ、主生與役呼奪也、是ハ體言ノ助辞格ナリ。

四品ハ、六格ノ中呼奪二格ヲ除タル也。

用言ノ助辞格ニ過去、現在、未来ノ三格有り、悉談ニテハ十羅聲ト云、文政中余嘗テ悉談ノハ轉十羅、西洋ノ九品六格ヲ折中シ體言ノ助辞六格ニ用言ノ助辞三格ヲ加エテ、九品九格トシテ、以テ和漢ノ語法ヲサトセリ。

資料7『熟語定式』（1オ～2オ）

熟語定式題言

天下之言語各體不同。而其別僅不_レ過_二二等_一。曰訓語。曰韻語是也。如_二國語及印度語_一。謂_二之訓語_一。如_二漢語及學露語_一。謂_二之韻語_一。而至_二其品格_一。則訓韻二語為_二同一種_一也。悉談有_二八轉声_一。所謂體言及體言助辞轉析之法也。西洋語法有_二九等六格_一。或為_二十品四格_一、九等即體用諸言是也。六格即九等之第一等。體言助辞分析之法也。十品即九等中。分_二體言_一為_二二等_一也。四格即六格中除_二呼奪二格_一也。戊申前從_二十品六格_一。後論定以為_二九言九助辞_一。蓋九是洛書之極數。有_二天地_一來、不_レ可_レ易之定式（以下略）

資料8

梵語新譯

鶴峯戊申 著

萬國ノ言語同ジカラズトイヘトモ。其品格ニ於テハ何レノ國モ違フ_レナシ。漢語法ハ既ニ語学新書ノ各條ニ引タル文例等ニテ心得ベシ。ナホ對考ノ爲ニ。梵語ノ八轉声十羅声。西洋ノ六格又用言ノ助辞法ナドヲハ。一ワタリ心得オクベキワザ也。ソガ中ニ六格ナドハ。カノ國ノ語典ヲ訳セル書ナドモコレカレ有バ。ソヲ見テサトスベシ。八轉声ノ如キハ。唯其名ノミコトゴトシク聞エテ。其傳ハサダカナラザル_レ多シ。故ニ今イサ_レカ思ヒヨレル_レヲ云也。（以下略）

資料5に六つの書名を掲げておきました。実はこれ以外にもまだありまして、今日、鶴峯戊申のオランダ語関係のものとしてわかっているものが大体十前後あります。これについても、解説的なことを少し加えておきますと、最初に掲げました『ガラマチカ語学』、実はこれはここでは「ガラマチカ語学」として出しておきましたが「ガラマチカ語学」では、世間では通用しないかもしれません。これは東北大学図書館に所蔵されているものですが、同図書館では『ガラマテの語学』という書名になっております。『国書総目録』などでも、『ガラマテの語学』という書名で出ておりまして、『ガラマチカ語学』という書名ではどこにも出てまいりません。しかし、ここに全巻

の写真がありますが、その冒頭には「ガラムチカ語学」と書いてあります。これが、どういうわけか、登録されるときに『ガラムテの語学』になってしまったようなのです。ですから、世間的に言えば、これは『ガラムテの語学』と言わないと通らないかもしれません。これは紙のこよりで綴じた、ほんの十枚前後のもので、内容はオランダ文典の翻訳のための心覚えというか、翻訳の訳語・訳文をメモ風に書きしるしているもののようです。しかも、その始めに、「第二首篇」とあり、その下に、「セインタキス、文章」というように書いてあります。オランダ文典の文章論だとしますと、これはだいぶ新しいものではないかというふうに考えられます。オランダの原文によるオランダ文典の日本での翻刻書『和蘭文典』が天保の末年から嘉永年間へかけて出版されますが、その後篇の方が「セインタックス、文章論」で、これは、その翻訳のためのメモのようなものらしいのです。その『和蘭文典』の翻訳書が安政年間になるといろいろと出版されますが、もしそれらの翻訳書を利用しているとしますと、鶴峯戊申のオランダ語学関係のものとしては、むしろ戊申晩年のものかもしれません。鶴峯戊申のオランダ語学関係のものはだいたい入門書的なものが多く、まとまった形で文法を説いているものなどはあまりないのですが、その中で比較的まとまった形のものとして『洋文翻訳便覧』があります。最初に総論的なものをあげて、あとにオランダ文を翻訳するための具体的ないろんな注意事項と実際の訳文例がずうっとあげてあるものです。資料6に無窮会図書館所蔵の写本『洋文翻訳便覧』の一部を示しておきました。ここに『語学新書』の成立事情を考える上で非常に参考になることが書かれております。「熟語ヲハ。和蘭文典ニ教タル。十品四格。ニテサトスベシ」とあって、ここに十品四格として十の品詞と四の格があがっております。最初が実名詞、次が冠詞、それから附属名詞、数詞、代名詞、動詞、副詞、前置詞、続詞、歎息詞の十品詞です。そして、その次に「文典ノ十品四格ヲ。学ブニハ。九品九格ヲ。先覚ユベシ。」としてここで九品九格、要するに十の品詞のうちの冠詞を省いた九品詞で、オランダ語に

おける四格というのを更にいろいろふくらませて九格という形にして、ここで九品九格になっております。これが『語学新書』のいわゆる九品九格の中に生かされているということなのです。とにかく、こういうふうにしていちおう『語学新書』がオランダ文典を土台にしていることははっきりしているわけですが、一方で鶴峯戊申には悉曇関係それから漢語学、韻鏡研究などがあります。韻鏡研究は漢字音が中心ですので、あまり文法のことは出てきませんが、実は韻鏡研究関係の中にもこの九品九格のことなどが関連してノート風に書かれたりもしてはいるのですが、とにかく直接的には韻鏡関係の彼の著書には文法的なものはまともな形では出てきません。しかし、悉曇関係や漢語学の著書では、九品九格としていろいろな記述が見られます。それを資料7・8に一つずつ出しておきました。資料7の『熟語定式』は、漢語学・漢文法の書物です。ここに見られますように、漢文法を説くのに、やはり『語学新書』と同じような、或いは似たような立場から、漢語の品詞及びその働きを九つの品詞、九つの格としてとらえてゆくということが出ております。資料7に出しましたものは『鶴峯戊申著書』として、オランダ語関係、悉曇関係、漢語学、韻鏡関係のものなど、数種類を合わせて一冊に合冊した形になっておりまして、国立国会図書館所蔵のものです。その中にこの『熟語定式』が入っているのです。資料8もやはり同じ『鶴峯戊申著書』の中に入れられている『梵語新譯』です。『梵語新譯』は単独の写本としても無窮会図書館ほか二、三の所に所蔵されておりますが、ここに出しましたものは国立国会図書館所蔵のものです。彼の悉曇及び漢語学、あるいは日本語、そういうものを含めての基本的なもののとらえ方の考え方が出ておりますので引用しておきました。その冒頭のところに、「万国ノ言語同ジカラズトイヘトモ。其品格ニ於テハ何レノ國モ違フナシ。漢語法ハ既ニ語学新書ノ各條ニ引タル文例等ニテ心得ベシ。ナホ對考ノ爲ニ。梵語ノ八轉声十羅聲。西洋ノ六格又用言ノ助辞法ナドヲハ。一ワタリ心得オクベキワザ也。ソガ中ニ六格ナドハ。カノ國ノ語典ヲ訳セル書ナドモコレカレ有バ。ソヲ見テサトス

ベシ。八轉声ノ如キハ。唯其名ノミコトゴトシク聞エテ。其傳ハサダカナラザル」多シ。故ニ今イサゝカ思ヒヨレル」ヲ云也。云々」とあって、八轉声のことを中心にして、この『梵語新譯』は書かれております。「万国ノ言語同ジカラズトイヘトモ。其品格ニ於テハ何レノ國モ違フ」ナシ。」というふうに言っておりまして、戊申によりますと、世界の言語は基本的には同一の性格のものとして行なわれており、従って、これを説くのに当然同一のとらえ方をすることができる、それが日本語を通して具体的な形でまとめられたものが『語学新書』にのべられている九品九格なのだ、ということなのです。こういうことについては、齋藤春昌によって書かれた『語学新書』の序言の中でも説かれております。この序言では「師曰」として出ていますが、鶴峯戊申によれば、天地の間いっさいのもの、すべて言葉の面も同じような原理からできているのだということであります。たまたま、オランダ語の文典に接することによって、それ以前、悉曇のいわゆる八轉声などを通して考えてきたことが、オランダ語の文典などにも共通する面があることに戊申は気がついたわけです。これはある意味では当然なわけで、サンスクリットとオランダ語とは、印欧語として共通性があるものですから、オランダ語を学ぶことによって、悉曇を通して考えてきたことが裏付けられたわけです。言葉の本質といいますか、言葉の共通性がここにあるというように、彼は受け取ったように思われます。従って、これを漢語法にも適用し、更に日本語にも適用する。それが特に、日本語の文典として具体的な形になったのが『語学新書』というものになったものなのです。ですから、『語学新書』という書名にもおそらく、彼はそういう意味をもたせているものと思われます。つまり、「語学」というのは日本語の学というのではなく、語の学、言葉の学、むしろそういう一般的な意味をもたせたものと思われます。資料2に戊申の自序として引用しておきましたが、戊申によりますと、「ことばまなびのあたらしぶみのはしがき」とあって、「語学新書」というのを和語風に読むと「ことばまなびのあたらしぶみ」となります。「ことばまなび」は、『語学新

書』において、日本語を通して具体的な形で品詞及びその各品詞の使い方を九品九格という形で説明されているのですが、戊申の真意はむしろ日本語のそういう中にも、世界各国共通のものがあるという考え方が基本にあったようです。戊申以前には、具体的な書名としては「語学」という名をつけたものはないようです。鶴峯戊申には、『語学新書』のほかに、『語学筆受』という写本が伝わっております。内容は『語学新書』とほぼ大同小異ですけれども、これもたまたまこの『鶴峯戊申著書』の中に合綴されております。この書物では、その前に『磨光韻鏡聞書』、つまり韻鏡関係の本がありまして、そのあとにすぐ続いて綴じられており、その上、これが小さい形で『語学筆受』と出ているものですから、書名というよりは、『磨光韻鏡聞書』の中の一つの区切りのように受け取れたものだと思います。『語学筆受』という独立の書物として扱われておりません。しかし、明らかにこれは、ここで内容がかわっておりまして、この『語学筆受』の方は、『語学新書』と同じようなことが具体的に説かれています。鶴峯戊申が実際に自分で『語学筆受』という書名をつけたものか、あるいは鶴峯戊申のそういう語学関係のものを弟子が筆記して、それを弟子の方で『語学筆受』という書名にしたか、それはわからないのですが、とにかく鶴峯戊申の説を受け継いだ写本の中に『語学筆受』という、もう一つ「語学」という書名のものがあるわけです。ですから、「語学」という言葉は、どうも鶴峯戊申一派の人々の間に行なわれるようになり、むしろ、それは鶴峯戊申の言葉の学問、特に文法が中心ですが、世界の言語の文法というものは一つの原理で説明できるという考え方がその土台になって、それがたまたま日本語を通して具体的な形でまとめられた場合に、それを「語学」というふうに言ったというように思われます。御承知のように、「国語」という言葉が書名の上に出てくるのも、鶴峯戊申より少しあとで、したがって、戊申の語学関係の著書に「国語」という言葉が書名の上に出てこないのは、ある意味では当然かもしれないのですが、鶴峯戊申は、むしろ日本語のことを通して、言葉そのものの文法的なものの原理をこ

こで展開しようということで、『語学新書』という書名ができたと理解した方が、少なくとも、この中で説かれている彼のいろんな言説を見ますと、そう受け取ってよいのではないかと思います。ただし、これは世界の言語の認識がまだ十分に行なわれていないこの時代において、この書物の中で説かれていることは、いわゆる言葉一般の文法的な扱いとしては、非常に現実と離れたものであり、特に日本語の文法ということになりますと、悉曇やオランダ語学などを通して、それにもとづいた、こういう九品九格の扱いというものいろいろ実際面では不都合なことが多くあったわけです。そのために、『語学新書』そのものも、ある意味で、こういう西洋的なものを受け継いだ、まとまった文典の最初のものとして、いちおういろんな人に当時広く読まれたわけですが、それは『語学新書』は随分版を重ね、書名も『語学新書』だけでなく、『詞葉の錦』そのほかの書名でも出ていることでもわかりますが、内容的には、折角、彼が西洋の文法を通して日本語の文法を見直すということをしながらも、その後の日本語の文法研究にはほとんど実際には直接の影響なしに終わったということになったわけです。

今日は、国語学史の上で必ず出てくる『語学新書』というものが、オランダ文典からの直接の影響によって生まれたと、そういうことばかりが強調されておりますものですから、必ずしもそういうことだけではなく、『語学新書』そのものは、もう少し別の観点から見直されるべきだということを申し上げようと思って、お話し申しあげた次第です。